

身近な「不思議」「疑問」に 気が付く力・探究する力を育てる



生徒の「探究心」を引き出す教育が進む

町では、子どもたちの「確かな学力」「生きる力」の育成のために、様々な取組を行ってきました。特に、子どもたちが主体的に学びに向かい、様々な人との対話を通して、深く考え、学べるように「主体的・対話的で深い学び（アクティブラーニング）」の視点からの授業改善に町内全小中学校が力を入れています。

社会のグローバル化やIT産業の躍進など変化が激しい時代の中で、いかにして自分の人生を切り拓き、より良い社

会を創り出していくことができる力が、今後子どもたちには必要になります。そのためには、学習したことが学校の中だけで使うものではなく、社会の中で活用できるようになっていくことが大切です。だからこそ町内各校では、子どもたちの身近なものを教材に取り入れたり、子どもたちの考えや疑問を大切にしながら授業を行ったりと様々な工夫をしながら、身近なありふれたことに対して「何だろうか？」と疑問を持つ子どもたちの可能性を引き出す授業改善が行われています。

学んだことを人生や社会に活かそうとする
学びに向かう力、人間性など

子どもたちの「生きる力」「確かな学力」

実際の社会や生活で生きて働くための
知識及び技能

未知の状況にも対応できる
**思考力・判断力
表現力など**

今回、本川根中学校の快挙が実現した背景には、生徒たちの「自分の課題を解決したい」という強い思いや現場の教員の教育に懸ける姿勢があるように感じます。実際に入賞生徒を指導した進士隆司教諭に生徒との関わり方や授業方法などについてインタビューをしました。進士教諭は、生徒が持つ粘り強さや好奇心への賞賛とともに、「疑問と一緒に考えはしたが、自分は何も指導していない」と笑顔で話してくれました。

指導教諭interview ～学校現場から～



本川根中学校
進士 隆司 教諭

生徒たちの「追究欲」を引き出す問いかけを

今回の入賞の裏には、昨年同賞に入賞した春田浩奈さんの存在も大きいと思います。後輩たちは、権威ある賞を受賞した春田さんに刺激を受け、「自分も」と考えたのかもしれません。指導した生徒たちは皆、粘り強く、一つの課題に一心に打ち込む姿勢を持ちながら、柔軟性と吸収力がありました。そのような力は学校で「教えた」のではなく、地域の方に支えられながら身につけた力なのだと感じました。あえて指導したことは「責任感」を持つこと。本校は少人数故に、生徒たちには必ず果たすべき「役」があります。自分の役に責任を持ち、主体的に取り組むように学校では教員一丸となって指導しています。

研究を通して、生徒たちは、目標や課題を解決するための手段は決して一つではないことに気付いたと思います。学校や社会には身近な「小さな問い」があふれています。そのような問いに対して、好奇心と探究欲を持ちながら解決策を考えていく姿勢を、これからも大切にしていきたいと思っています。

昨年に引き続き、今年も町内の中学校の生徒が「日本学生科学賞」を受賞する快挙を達成しました。全国の中学生から高校生を対象にした国内最高峰の科学コンクールへの入賞の背景には何があったのか。本号では、町が取り組んできた教育に触れながら、入賞者や学校へのインタビューで見えてきた、快挙の裏側について紹介します。

「川根本町の中学生が 今年もやりましたよ！」

弾む声で町教育委員会から連絡が入ったのは、昨年12月下旬頃でした。毎年開催されている読売新聞社主催の「日本学生科学賞」の審査結果が発表され、全国から3万点を超える応募の中から、本川根中学校2年生の山内美琴さん（千頭西区）の研究作品が入選1等に、3年生の鳥澤光佑さん、圭佑さん兄弟（柳三区）が入選2等にそれぞれ入賞を果たしました。これは昨年度の同校卒業生の春田浩奈さんの入賞に次ぐ2年連続の快挙になります。

日本学生科学賞は、全国の中学生から高校生を対象とした日本最高峰の科学コンクールで、入賞することは決して簡単ではありません。科学の専門家による厳正な書類審査とプレゼンテーション審査を経て、上位20点に入選1等として選出されるのです。

厳しい審査を経験した山内さんは、「研究をまとめるのは難しかったけれど、あこがれの春田さんと同じ賞を自分も獲りたかった。先生と一緒に実験道具を作ったり、実証実験をしたりすることができて楽しかった」と顔をほころばせて話してくれました。

本号では、学校や生徒へのインタビューを通して、この快挙につながった背景などに迫っていきます。